

● 阪神・淡路大震災から1年

—これまでの動きと今後の課題—

昨年1月17日未明阪神間を襲った大地震により、6000人を超す尊い命や家屋、町並み、経済活動、文化など人々の暮らしや地域の基盤となるものが一瞬にしてすっぽりと失われてしまいました。今なお各地のグラウンドなどに建てられた仮設住宅で暮らさざるをえない方々が5万戸以上という状況に象徴されるように厳しい現状が続いています。

図書館はじめ文化施設も大きな被害を受け、その被害と復旧の機子は『図書館雑誌』にも掲載され、全国の注目を集めたことと思います。関東大震災以来のおおきな都市型大地震として、災害と図書館、その対応の問題点なども含む包括的で後世に役立つような「図書館界／被災復旧記録報告書」のようなものが図書館の館種を越えてまとめられ出版されることが、今後の課題として大事かと思えます。ここでは、これまでの国内の地震災害などでは見られなかった「新しい萌芽や動向」のいくつかについて震災1年の節目に触れておきたいと思えます。

まず、第一は4月に被災地の図書館司書有志で組織された「震災記録を残すライブラリアン・ネットワーク」の存在です。震災という広域テーマに対し、個々の図書館単独では対処できない課題を連携して解決していこうという下からの実践的な動きです。第二は現行の指定文化財制度の脆さと、普段からの身近な文化財を守ろうとする活動の重要性や新しく導入されている文化財登録制度です。第三は東京に主要な研究機関や施設、情報が一極集中している弊害が露呈され、反省として図書館にも関係する「文化財防災資料セン

▶ 兵庫県から日図協へ感謝状

昨年12月、日本図書館協会へ兵庫県から感謝状が届いた。震災から1年近くたち、兵庫県に対し寄せられた支援に謝意を表したものである。

大震災 NEWS

● 阪神・淡路大震災から1年後の報告

平成7年1月17日未明に阪神・淡路地区を襲った大震災から、ほぼ1年を迎えようとしています。この間にも、被災地の図書館は着実に歩みを続けております。この1年間の被災地での図書館の動きをいくつかのポイントに分けて紹介します。

一つめにボランティア。震災直後には公共図書館で図書館員や市民によるボランティアが、また震災数カ月後には、大学図書館で学生ボランティアが活動しました。

二つめは震災資料の収集。これらの資料は、後からでは入手困難なものが多くあります。現在のところ、神戸大学図書館・兵庫県立図書館・神戸市立中央図書館が積極的に収集しておりますが、阪神地域の図書館でもさまざまな震災資料を収集しています。

三つめには震災対策の必要性。被災地の各図書館からも「開館時間であれば大惨事になっていた」との指摘が相次ぎました。すべて

の震災に対応できるマニュアルは作成不可能ですが、最低限の状況に対応できるマニュアルは今後必要となるでしょう。

四つめには図書館財政の削減。今回の震災は、自治体なり大学なりの財政にかなりの影響を与えました。このことが安易な形での図書館費の削減につながるよう、図書館の復興のあり方とともに考える必要があります。

五つめには震災時の図書館のあり方。今回の震災では「なぜもっと早く開館できなかったのか」といったような指摘がありました。各図書館でさまざまな事情があるにせよ、このことは災害時の図書館のあり方を考える上で重要な点であります。

*

前述のさまざまな状況に対して関西対策委員会では、次年度の早い時期にシンポジウムを行い、復興への提言をする予定にしております。

(日本図書館協会阪神・淡路大震災関西対策委員会)

news news news

ター（仮称）」が被害のひどかった神戸市内の博物館に開かれようとしていることです。

また、1月下旬には震災記録情報センターなどの主催で、神戸・六甲アイランドを会場に、日本で最初に被災地・神戸に導入された米国製エンキャプスレーターの実演や日図協資料保存委員会所有の「資料保存」パネルやさまざまなビデオの紹介、膨大な量と種類となる「震災記録」の整理・保存シンポなど関西初の<イベント Part 1>が予定されるなど、明日に向かう営々とした努力が続けられています。今後とも息の長い阪神間の復興に皆さまのさまざまな支援をお願い申し上げます。

（坂本勇：阪神淡路大震災「震災記録情報センター」事務局長）